

# キハダ

*Phellodendron amurense*

ミカン科

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チヨウ

樹木

(草花)  
(在来種)

(草花)  
(外来種)

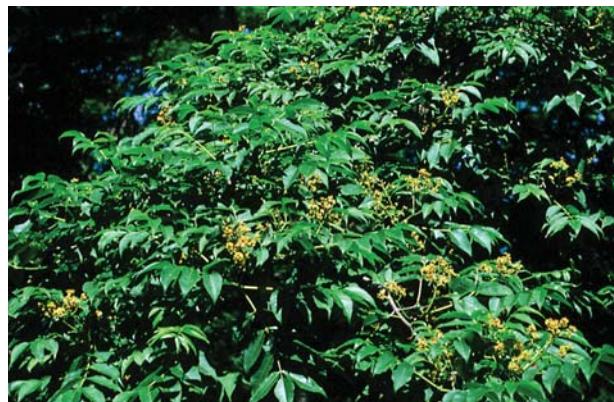
哺乳類

(鳥)  
(水辺)

(草原・樹林)  
(シタカ)

## 生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期				■								
結実期							■	■				



キハダ。雄花が咲いている

## 形態的特徴

山地や平地に生える落葉樹、樹高25m。雌雄異株。葉は対生し、奇数羽状複葉で長さ20~40cm。小葉は5~13枚、卵状長楕円形で先はとがり、長さ5~10cm、ふぞろいな鋸歯縁（ゆるやかなギザギザ）、主脈に白毛がある。樹皮は淡褐色で、厚いコルク質。縦に裂け、内皮は鮮やかな黄色。花は雌雄異花、黄緑色で径約8mm、円錐花序に多数つく。花軸には褐短毛を密生、花弁は5、雌花の柱頭は褐色で退化した雄しべ5本があり、雄花の葯は黄色で5本の雄しべと退化した雌しべがある。6~7月に開花。果実は径8~

10mmの球形、9~10月に黒熟。（葉や花序に毛がなく小葉の幅がやや広く、樹皮のコルク質が薄いものをヒロハノキハダと呼ぶことがある）

類似種との見分け方：キハダの枝先はヤチダモやオニグルミのように太くならない。樹皮がコルク質ならキハダ。また、キハダの樹皮をはぐと鮮黄色をしている。キハダの実は柑橘系の臭いがする。キハダはハルニレ林などに少ない割合で混交することが多い。



キハダの雄花



キハダの雌花



キハダの実。熟すと  
黒くなる



キハダの葉。これで一つの葉（羽状複葉）。  
ふぞろいな緩いギザギザがある。主脈に白い毛。



キハダの樹形



キハダの樹皮。コルク質で  
柔らかく、内皮は黄色い



キハダの冬芽。半球形  
で2~4mm、対生



キハダ。枝先の葉と雄花のつぼみ  
で2~4mm、対生

## 樹木

## 生育環境・分布

山地や平地の水辺等に生育する。土壤：埴質壤土、肥沃土、適潤性～弱湿性、通気性は中程度の場所、pHは中性、堅密度は中程度の場所。陽性木。

**分布：**国外分布は、朝鮮、中国東北部、アムール、ウスリ

## 繁殖生態・寿命

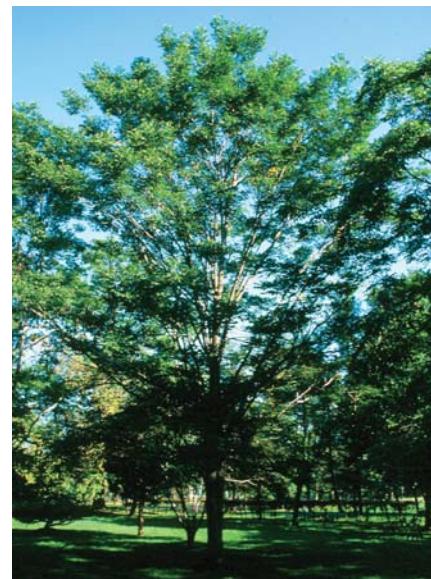
花期は6～7月、果実は9～10月に熟する。鳥や動物によって種子分散される。寿命は200年。

## 他生物との関わり

アゲハチョウ、ミヤマカラスアゲハ、カラスアゲハ、ルリシジミなどの幼虫の食樹。鳥や動物によって種子分散される。



ミヤマカラスアゲハ。幼虫時、キハダを食樹とする



キハダ

## 植栽関係

土壤：埴質壤土、肥沃土、適潤性～弱湿性、通気性は中程度の場所、pHは中性、堅密度は中程度の場所。陽性木。実生による。取り蒔き、または秋に採取した種子を土中保存し、翌春に植える。挿し木や移植は困難。樹齢40年で、

直径16cm、樹高7m、根系の最大深度190cm、根の広がり半径1.5m。根の支持力は弱い。移植難易度は難（落葉時は容易）。表土が深い場所に群落をつくる。切り株からは萌芽することは少ない。挿し木では活着しない。

## 興味深い話

■公園樹などに用い、内皮（黄柏）を薬用に用いる。漢方では樹皮を黄柏と言い、整腸薬として用いる。奈良県でつくられる腹痛薬「陀羅尼助（だらにすけ）」はこれを材料としている。内皮は黄色の染料とされ、防虫作用があるため、写経をする紙もこれで染めた。材は美しく重宝され、家具や工芸具、器具、建築材として用いられる。

■キハダの花は、ハチミツの蜜源として重要である。

■キハダは黄色染料として中国から伝わったが、中国では最上階級の服装の色（黄色）をキハダで染めたのだという。

■十勝地方のアイヌ語では「シケレペニ」という。

■キハダの実をアイヌ語で「シケルペ（ぬるぬるした実）」という。キハダの実は、霜が降りる前にとり、乾燥させて保存し、一年を通じて食料や薬として欠かせないものだった。実を浸しつけた汁は最初は捨てるが、数回取り替えた黒い汁に水飴や蜂蜜などを入れて煮詰め、せき止めとする。長時間煮詰めた実をなめると風邪に効くという。また、アイヌは黄色を尊び、信仰に関わるもののみをキハダで染めたのだという。

## 配慮事項

樹齢40年で、直径16cm、樹高7m、根系の最大深度190cm、根の広がり半径1.5m。根の支持力は弱い。移植難易度は難

（落葉時は容易）。表土が深い場所に群落をつくる。切り株からは萌芽することは少ない。挿し木では活着しない。

## 参考文献

- 「図説花と樹の大事典」木村陽二郎 監修 植物文化研究会・雅麗 編集 柏書房 1996
- 「アイヌ植物誌」福岡イト子 草風館 1995
- 「新装版 樹木根系図説」苅住昇 誠文堂新光社 1987
- 「日本のチョウ」上野明雄 小学館 1981
- 「北海道 庭と庭木のすべて」原秀雄・須田輝 北海道新聞社 1978
- 「新版 北海道の樹」辻井達一・梅沢俊・佐藤孝夫 北海道大学図書刊行会 1992
- 「日本の野生植物 木本 I」佐竹義輔・原寛・亘理俊治・富成忠

夫編 平凡社 1989

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館（編）、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

「知里真志保著作集 別巻I 植物編・動物編」知里真志保、平凡社、1976

「天然林施業Q&A」石塚森吉ら 北方林業会編 pp. 107-108 1988  
萌芽更新を利用した広葉樹の施業 佐藤俊彦 年一巻号：光珠内季報 1999-116

緑化樹の用土別によるさし木発根成績 吉川栄二 光珠内季報23号 p:11~p:13 1975

魚類

底生動物類

爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

草花

外來種

哺乳類

鳥類

草原・樹木